

◆飛鳥寺の調査—第91-8次、第97次

1 第91-8次調査

はじめに

飛鳥寺の北面大垣は、『飛鳥寺発掘調査報告』（奈文研学報第5冊、1958）の段階では、中金堂の北約100m、大字飛鳥集落の中央を東西に通る、現在のバス通りと推測された。

だが、1977年にそれよりさらに北100mの地点を調査したところ、掘立柱東西塀（SA500）がみつかった。その北側の堀（SD501）からは多量の飛鳥寺所用瓦が出土したので、この塀が飛鳥寺の北面大垣と考えられた（『藤原概報8』52・53頁）。

1982年には、1977年調査区から80m東方で調査が行われ、北面大垣SA500の東延長部と大垣東北隅を確認した。東面大垣SA600は北面大垣と直交せず、鈍角に開いて北で西に8度振れた方位をとる（『藤原概報13』22～27頁）。

これらの調査の結果、飛鳥寺の寺地は南北に長い台形をしており、大垣間で南北293m、東西は北で215m、南で約260m、面積約70,000㎡と推定されるに至った。

今回の調査地は、1977年調査地の東に隣接する水田で、北面大垣と北外堀の確認を目的とした。調査面積は70㎡。

遺構

調査の結果、当初の予想通り、北面大垣SA500と北外堀SD501を確認した（図22）。SA500は、柱掘形が一辺1～1.3m、深さは1m前後あり、そのほぼ中央には淡褐灰色砂質土が詰まった直径約0.3mの柱痕跡がある。柱穴は、山土混りの黒褐色ないし茶褐色砂質土で埋められ、埋土には少量の瓦片を含む。柱筋は国土方眼方位に対して、東で北に約1度振れている。

SA500の柱穴は、深さ0.2mほどの浅い溝状の地業SX990を行った上から掘り込まれている。地業の北辺は柱心から2mの位置にあるが、南は調査区外にあるため

確認できなかった。山土混りの明黄灰色ないし明灰色の砂質土を埋土とする。

外堀SD501は、上幅2.6m、深さ1.1mあり、北面大垣SA500とは溝心で3mを隔てる。溝の埋土は、大きく3層にわかれる。中層と下層には、南側から流れ込むように、大量の瓦が入っていたほか、南岸の近くには人頭大の川原石が多くみつかった。1977年調査の概要報告では、SD501に石組護岸を想定したが、護岸とするには量が少ない。大垣SA500に基壇があり、その基壇化粧に使用された石だろう。

そのほか、大小の土坑や素掘溝を検出した。いずれも瓦器を含む鎌倉時代の遺構。

出土遺物

外堀SD501から大量の瓦が出土した。丸瓦・平瓦・軒丸瓦・軒平瓦・塀があり、丸瓦は、2461点・339.2kg、平瓦は、7866点・805.5kgが出土した。

軒瓦は49点出土した（図23）。軒丸瓦45点に対して軒平瓦は4点と少ない。型式別の内訳は、I型式36点（a10点、b26点）、III型式a3点、XIV型式3点、XV型式a1点、不明2点。軒平瓦は、II型式（四重弧紋）1点、IV型式B種1点、VI型式2点。

軒丸瓦の8割は飛鳥寺創建の素弁十弁蓮華紋I型式だが、その2/3は中房周囲と中心蓮子を彫り直したb。この出土傾向は、西隣の1977年調査区や、1982年の寺域東北隅調査区と共通する。

複弁蓮華紋軒丸瓦は、天武朝の造作に使われたと推定されるXIV型式と、平城京元興寺の創建軒丸瓦XV型式a（6201型式Aa種）がある。両者とも素紋の斜縁をもつ点でよく似るが、XV型式のほうが大型。また、中房蓮子の数が違い、XIV型式は1+4+8に対し、XV型式は1+8+8。

軒平瓦のIV型式B種（6661型式B種）は大官大寺所用、平安時代のVI型式は平城京元興寺と同範。IV型式B種は

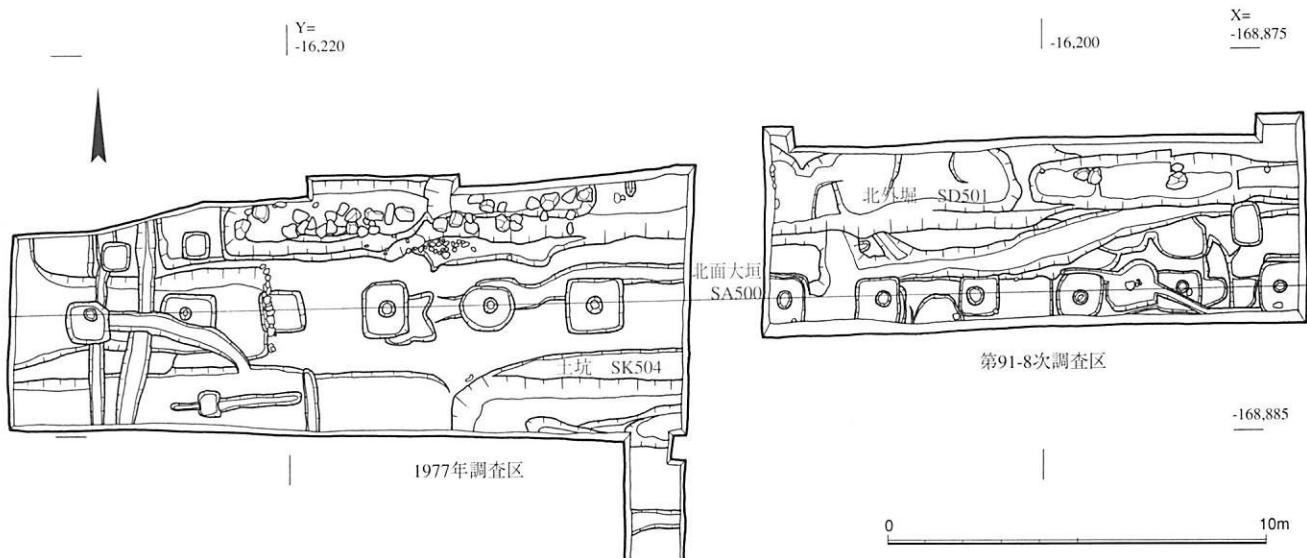


图22 第91-8次調査遺構図 1:200

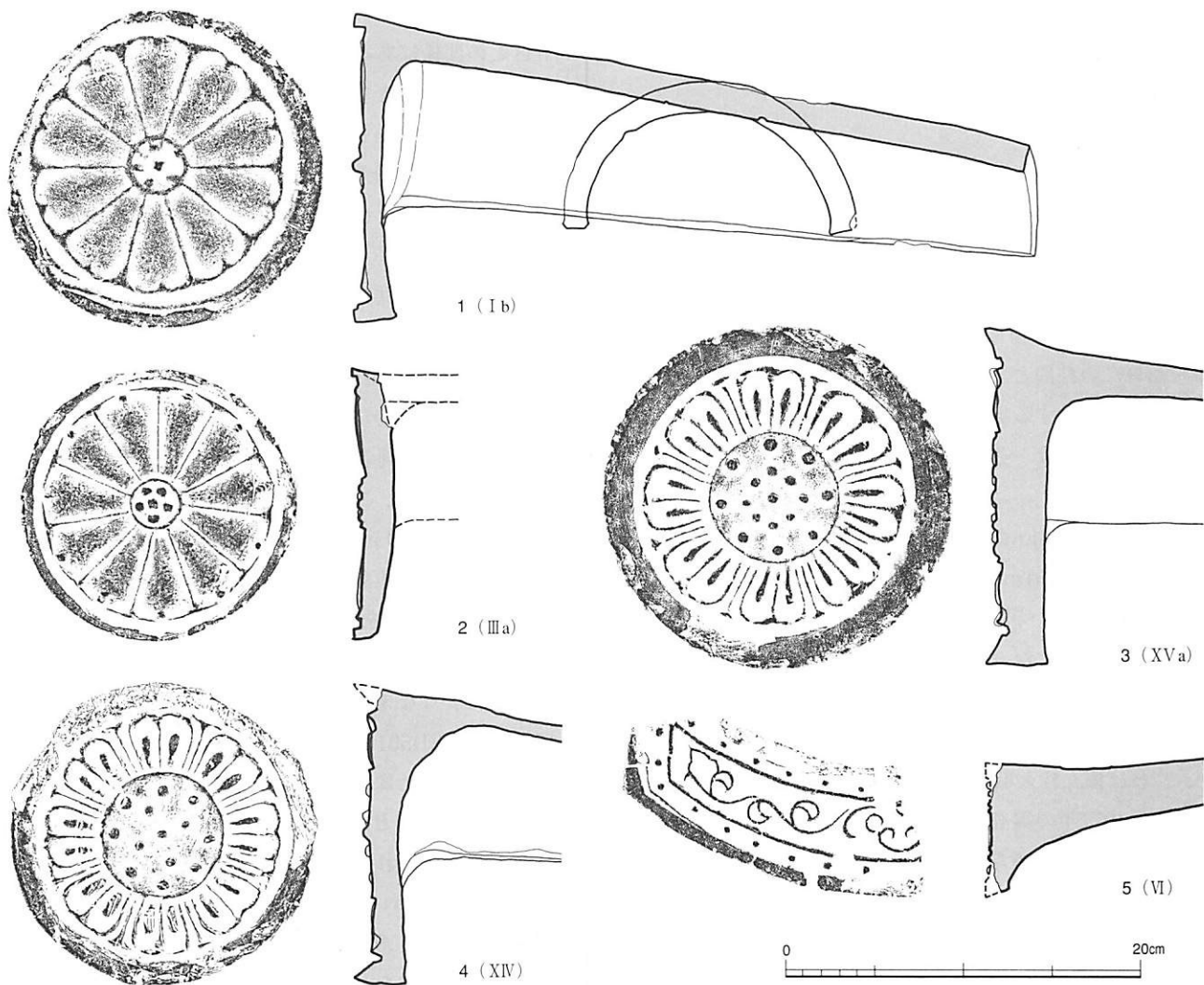


图23 第91-8次調査出土軒瓦 1:4

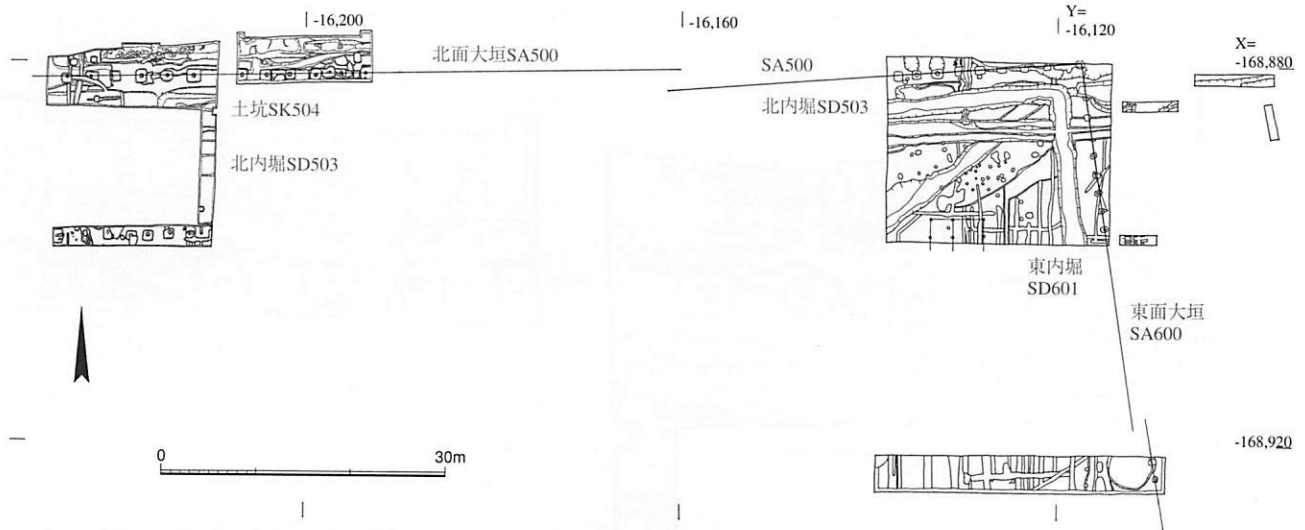


図24 飛鳥寺北面大垣と寺域東北隅の状況 1 : 800

左側辺を焼成後に削り、またⅥ型式の1点も左側辺を打ち欠いたような痕跡をとどめる。あるいは隅軒平瓦か。

ほかに、土器と鉄釘が出土した。

まとめ

北面大垣SA500を新たに5間分検出し、1977年調査区を含めると12間分を確認できた。二つの調査区両端の柱間距離は31.6mあり、柱間2.63mと計算できる。

この柱間は、西面大垣SA700（『藤原概報16』、『年報1997-II』）および南面東方の掘立柱大垣SA100（本年報23～25頁）の柱間と全く一致する。西面大垣とは、柱筋の方眼方位に対する振れもほとんどかわらないので、北面と西面の大垣は一連の造作にかかるものとみてよからう。

また、柱間2.63mは、小尺1尺0.293mとして9尺、高麗尺だと1尺0.351mとして7.5尺にあたる。小尺1尺を0.293mとすると、寺域の南北規模は1000小尺に復元できることとなり、また、高麗尺1尺0.351mは、中門や南門の柱間から復元できる数値にきわめて近い。現段階では、小尺と高麗尺のいずれを使用尺とすべきか判断が難しいが、これは掘立柱大垣の設定時期にも関連する。

さて、1977年の調査では北外堀SD501に石組護岸を想定したが、今回は護岸の抜取痕跡を確認できなかった。外堀SD501に転落した石は、北面大垣SA500に低い基壇を想定して、その化粧石と考えるべきだろう。第97次調査では、南面大垣SA100に縁石をもつ基壇を確認した。北面大垣も同じ意匠とみてよからう。

北面大垣に関しての問題点は、今調査区東方の1982年調査区との関係にある（図24）。

第一に、この調査でみつかった北面大垣は掘形一辺0.8～1mで柱間も2.2mしかなく、柱筋も東で北へ4度と振れ角が大きい。図上でみると、今回と1977年調査区のSA500延長推定線とは交わらない。東面大垣SA600の場合、柱穴がさらに小さく柱間は2mと一層狭い。北面大垣と西面大垣との共通性を考えると、推定寺域東北隅での大垣は今回検出したものと一連の造作とは思えない。

第二に、内堀SD503は、1977年調査区では北面大垣の南9.6mに位置するのに対し、1982年調査区ではその距離が3mしかない。両者を単純に結ぶと、北面大垣と方位があわない。ただ、これに関しては、西面大垣の内堀が大垣の東（内側）3mにあることを考慮すると、むしろ1977年調査区での距離が大きすぎる。大垣の南3mにある溝状の土坑SK504をそれにあてるべきだろうか。

今回の調査は、一応1977年の調査成果を追認したが、上に述べたような未解決の問題もある。蛇足を加えるならば、北外堀SD501から出土した大量の瓦からみて、北面大垣SA500が瓦葺だったことは疑えないが、出土した軒平瓦に隅軒平瓦と思われる個体があることは不審で、これが大垣に葺かれていたとすれば、近くに大垣の曲がり角を想定しなければならない。

以上のように、飛鳥寺寺域東北部の大垣については、途中での寺域拡大などを考慮に入れつつ、今後さらに検討する必要がある。

（花谷 浩）

2 第97次調査

はじめに

本調査は、万葉ミュージアム（仮称）建設予定地の北端において、民有の水田との境に擁壁を築く工事に伴い実施した。すぐ南は1997年度の第84次調査区で、調査区の北壁西端には、飛鳥寺東南禅院の南限に関わる塀の基壇か雨落溝になるとと思われる石列がのぞき、北端の水田との境になる畦には注意を向けていたところである。遺憾にも擁壁工事が先行し、後述するように南面大垣に関わる重要な遺構は東半と西端でかなりの破壊を受けた。

調査区は、第84次調査と一部重複させて南北5～8m、東西約56mとした。調査面積は380㎡、調査期間は1999年3月15日から5月8日であった。

基本層序

調査地は、田の畦であり、上から30～40cmで中世の遺物を含む灰褐色土に至る。厚さ20～30cm。以下は、上層瓦層、東西溝SD103Aや石敷SX105、茶灰色土（茶灰色土Ⅱ）、東西溝SD103Bの順である。上層瓦層は、後述する飛鳥寺東南禅院南面大垣SA100の屋根瓦を廃棄したもので、基壇以南や石敷上に比較的密に認められた。東西溝SD103AはSA100の南縁石に沿う雨落溝で、石敷を一部破壊する。石敷SX105は雨落溝SD103Bの上であり、茶灰色土は石敷以西にあって下層瓦層を覆う土である。

SA100やSD103Bなど上層遺構のベースは、下層の遺構があり、一様でない。南北大溝SD106以東は、古い時期の堆積で、上から厚さがそれぞれ20～30cmの暗褐色砂質土など4層があり、青灰色砂質土に至る。SD106以西は、部分的に細砂層を挟む淡褐色砂質土（厚さ10～30cm）や花崗岩風化土を含む黄褐色土（厚さ20～40cm）の整地土で、この下で東西溝SD52や南北大溝SD106の底の石列を検出した。これらの石列の下は、厚さが10～20cmの有機質（スクモ）層で、青灰色砂質土に至る。なお、東西大溝SD51は、南北大溝SD106以西では淡褐色砂質土、SD106以東では暗褐色砂質土がベースである。

検出遺構

上層遺構 飛鳥寺東南禅院の南面大垣と推定する掘立柱東西塀SA100、南雨落溝SD103A・B、石敷施設SX105、道路SF50などがある。

SA100 調査区西半で6間分を検出した。方位は東で北

に約32度ほど振れる。柱根は3本残るが、他の4本は抜き取られていた。柱間は、柱根で測ると、約2.6mと約2.7m。ばらつきがあるが、抜取穴を加えて平均すると、柱間2.68m前後（9尺）になる。石敷SX105の北東で検出した1個の柱穴もSA100の続きである可能性が高い。

柱掘形は、南北2.5m前後、東西2.0～2.2m、深さは1.2～1.3mである。柱根は径約27cmで、長さ70～80cm残っていた。取り上げた1本はコウヤマキで、辺材部は残っておらず、年輪で知られる伐採年代は586年+ α である。柱抜取穴からは飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器、東南禅院所用の7世紀第4四半期頃の丸・平瓦のほか、人頭大の川原石や天理・石上産の砂岩切石片が出土した。

基壇は柱掘形の上に土を積み、南側に人頭大の川原石（1箇所だけ凝灰岩切石）を据えて縁石としていた。積土は部分的に厚さ10～15cmほど残っていたが、積み固めたものではない。この上面では柱抜取穴は見えるが、柱掘形が見えないため、柱を立てた後に基壇を積んだことがわかる。南側の縁石は底石が一段程度残っていた（高さ30～50cm）。北側の縁石は残っていなかった。柱筋から南側の縁石前面までの距離は約1.2m。飛鳥寺南門の東で検出している大垣の石積み基壇幅約2.5mに近い。

SD103A・B SA100の南にある素掘りの雨落溝。Aは石敷SX105を一部破壊して東流する。幅30～70cm、深さ10～30cm。BはSX105下を東流する。幅約70cm、深さ20～30cm。Bの堆積土の上には、SX105から西約11mまでと、東は少なくとも5mまでの範囲にわたって瓦の小片を敷きつめていた（下層瓦層）。石敷が沈まないための工夫であろう。飛鳥寺創建時の瓦がほとんどで、他所から運び込まれた可能性がある。他に東南禅院所用の軒平瓦ⅠB、飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器を含む。雨落溝SD103Bからも飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。下層瓦層上の茶灰色土からは奈良時代の土器や東南禅院所用の瓦が出土した。

SX105 南面大垣の南にある石敷施設。北はSD103Aが破壊する。北東部は擁壁工事で破壊されているが、東南隅の一石は残る。南北は南面大垣心から約3.0mになる。東西は約8.1mで、両端は南面大垣の柱心に揃えているようである。大垣の南門があり、それに伴う施設と考える。

SX101・102 SA100より古い柱穴列。SA100の柱穴で消失したものもあり、不明な点が多い。SX101は3間以上、SX102は4間以上で、両者とも柱間1.8m等間。

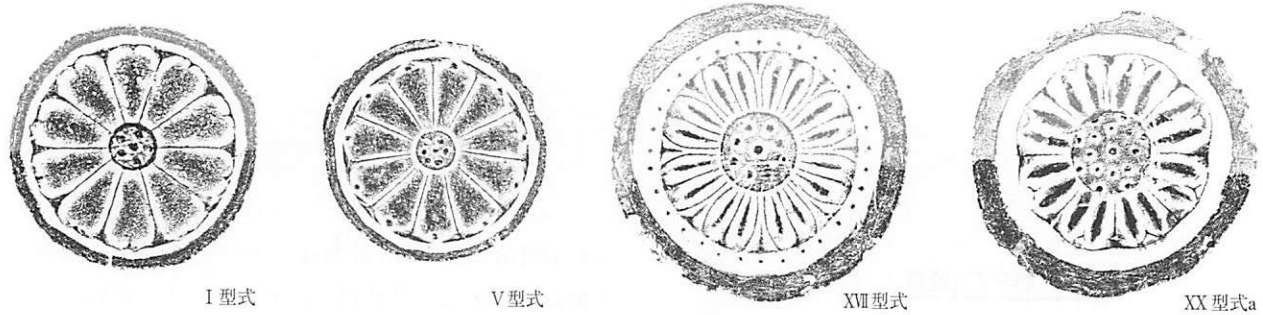


図25 第97次調査出土軒瓦 1:5

柱掘形はともに南北約1.0m、東西約0.8m、深さは約1.2mある。SX101とSX102の間は3.5~3.6mあり、中間にSA100の柱穴がある。SX101とSX102が一連の塀であった可能性もあるが、柱間が1.8mと短い点問題も残る。柱穴から飛鳥寺創建時の瓦小片が数点出土した。

下層遺構 第84次調査区から続く東西大溝SD51と、これより古い石組東西溝SD52、南北大溝SD106がある。

SD51 上幅2.0~2.3m、深さ約0.5mの素掘りの溝で、北東に流れる。振れは、上層のSA100やSD47より大きい。遺物は土器と瓦の小片が少量出土。第84次調査では藤原宮期直前の土器が出土している。

SD52・106 SD52は北岸に人頭大の石を積むが、底石が残る程度である。深さ0.2~0.4m。南岸は、第84次調査区で西端から10mまでは素掘りであること(幅約1m)を確認したが、以東では不明であった。今回の調査では、SD52は南北大溝SD106で終ること、南岸はSD106近くでは南へ離れ、北岸から3mの範囲にはないことを確認した。SD106は、飛鳥池遺跡から南に広がる谷の東縁に沿って掘られた素掘りの南北大溝(幅約2m、深さ約1m)で、谷に堆積した有機質(スクモ)層を切っている。この溝が40cmほど埋まったのち、東岸にはSD52の底とほぼ同じレベルで人頭大から拳大の石を積んだようであるが、ほとんど崩れていた。SD52とSD106とが接続する部分では、両者とも石積みが片側だけであり、池状になっていたと推測できる。底から飛鳥Iの土器が少量出土したが、瓦はなかった。

出土遺物

南西大垣に関わる瓦が多量に出土しており、これについては後で触れる。土器は小片が多い。遺構の年代に関わるものは前節で取り上げた。南面大垣の石敷付近の上層瓦層などから平安時代前期の緑釉皿や灰釉椀・壺片、茶灰色土などから円面硯片2点が出土。谷のスクモ層からは5世紀後半の須恵器蓋が出土。他に、下層瓦層からは、天理・石上産の砂岩切石や銅滓・鉄釘若干と、弥生時代の扁平片刃石斧1点も出土した。

瓦埴類 軒丸瓦84点、軒平瓦24点、鬘斗瓦36点、面戸瓦

11点、埴28点(12.5kg)、丸瓦5,649点(607.5kg)、平瓦25,683点(2,462.5kg)が出土した。軒丸瓦の内訳は、I型式49点、III型式8点、V型式1点、VI型式1点、VII型式1点、XIV型式2点、XVII型式12点、XVIII型式3点、XX型式a3点、型式不明4点。I~VII型式が飛鳥寺創建期の瓦、XVII~XX型式が東南禅院の創建に伴う瓦である。軒平瓦は、藤原宮式の6641E1点を除く23点すべてが三重弧紋(I型式)で、中でもIBが20点と圧倒的に多く、軒丸瓦XVII~XX型式と組み合う。

南面大垣の瓦は、格子または平行叩きののちナデ調整を施す飛鳥寺創建期の瓦に加えて、タテの縄叩きをおこなう東南禅院の創建瓦をかなり含む。一方、石敷SX105基底の下層瓦層の瓦は、ほとんどが飛鳥寺創建期に限られ、橙褐色を呈する「花組」の瓦が大半を占める。

まとめ

今回の調査では、飛鳥寺南面大垣SA100とこの関連遺構を検出したのが最大の成果で、以下、要点を列記する。

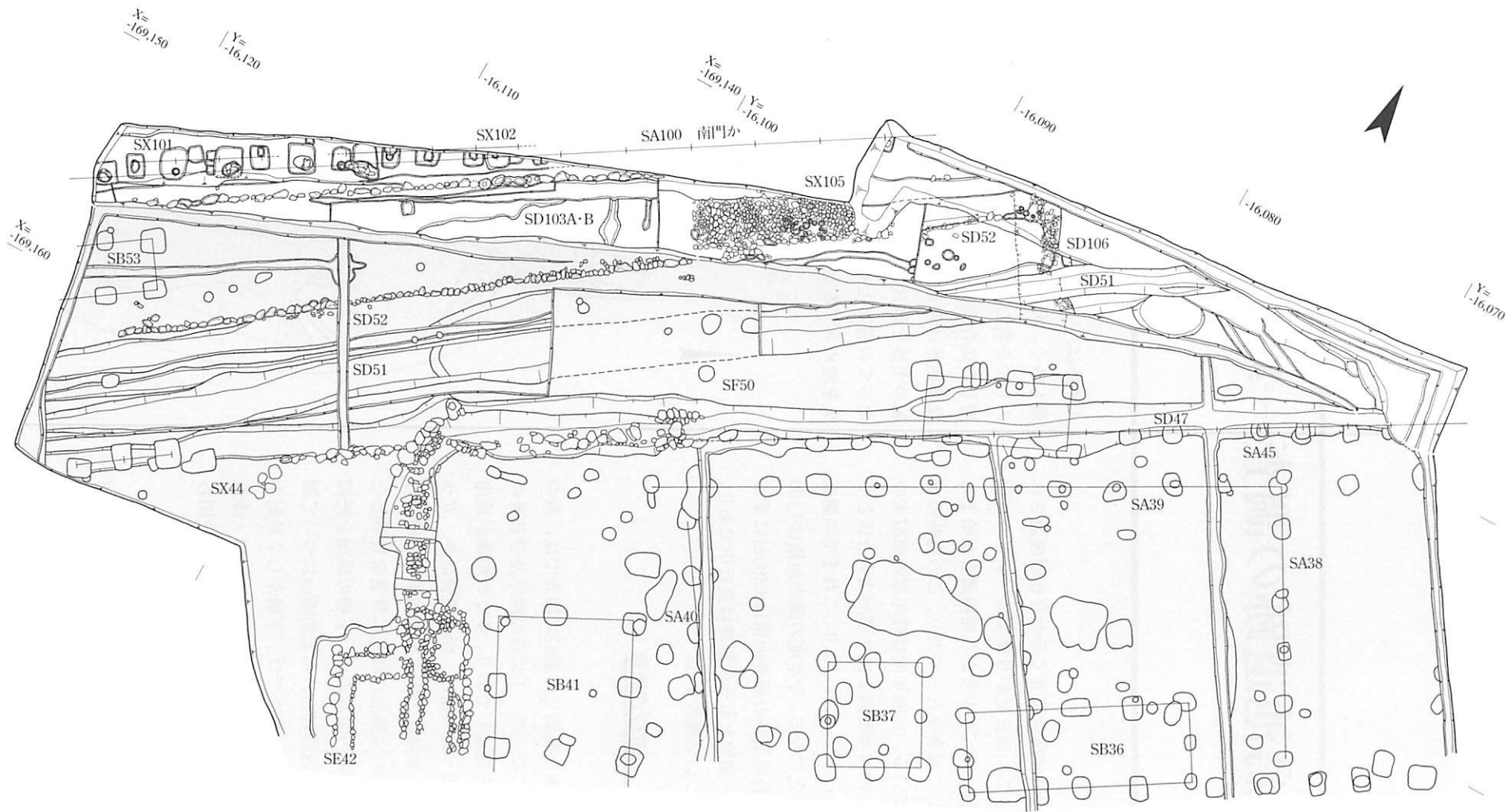
① SA100は掘立柱塀で、柱間は約2.68m(9尺)と判明した。この知見は、飛鳥寺の西面大垣(飛鳥寺1996-1・3次)、北門東の北面大垣(飛鳥寺1977、第91-8次)と同じである。北東隅(飛鳥寺1982)で柱間が2.0~2.3mであるのは、別個のものである可能性が高い。

② SA100は基壇に縁石があった。伽藍中軸の南門東西の大垣(飛鳥寺第2次、1979)では、基壇に縁石があり、築地塀を想定している。だが、今回の調査では、基壇下に柱穴があり、築地塀でない可能性が高くなった。

③ SA100は、柱抜取穴や上層瓦層の瓦が、この北方の調査(飛鳥寺1992-1次)で出土した推定東南禅院仏堂の瓦と同じで、7世紀第4四半期に比定できる。SX101・102の時期や性格の究明が課題となる。石敷SX105の北に東南禅院の南門が推定されるが、この調査も今後の課題である。

④ SA100と方位が近似し、出土遺物からも共存するのはSD47である。両者の間が飛鳥寺東南禅院と飛鳥池遺跡とを画す東西道路SF50で、SA100の縁石からSD47の北肩までは約9.5mと判明した。

(毛利光俊彦)



第84次調査

0 10m

図26 第97次調査遺構図 1 : 250